研究報告

ストーマをもつ既婚女性の日常生活における 困難の捉え方と対処

Recognizing and Coping with Troubles Married Women with Stoma Face in Everyday Life

三木佳子

Yoshiko Miki

キーワード：ストーマ，女性，対処，日常生活

Key words : stoma, women, coping, everyday life

Abstract

Objectives : The purpose of this study was to ascertain what sorts of troubles married women living with stoma face in everyday life as well as the ways in which they cope with those troubles with the goal being to gain better insight so as to provide a higher level of nursing support.

Method : Five 5-year post-operative married women subjects with gastrointestinal stoma leading everyday lives, were interviewed using a semi-structured format, and performed analyses based on qualitative induction.

Result : Married women having stoma have become clear that the difficulties in everyday life are being viewed. “The trouble and distress caused by stoma in daily life” while countermeasures are seen as “making sense of oneself with stoma,” “creating strategies for helping to lead an ordinary life,” and “achieving a stable renewed sense of oneself living with stoma in everyday life.”

Conclusion : The results suggest, as an aid for nursing care, it is vital to provide assistance that focus on helping women in their relationship with their husband and face the public eye, it is also necessary to provide help that accommodates to each individual’s sense of value, the importance of an ongoing long-term support.

要 旨

目的：本研究は、ストーマをもつ既婚女性たちが、日常生活の困難をどのように捉え、どのように対処したかを記述し、看護支援の示唆を得ることを目的とした。

方法：消化管ストーマ造設後5年以上経過し、日常生活を行っている既婚女性5名に、半構成的面接でデータを収集し、質的帰納的に分析した。

結果：ストーマをもつ既婚女性は《ストーマをもって生きる上での困難に苦悩する》と捉えて、《ストーマをもつ自分を意味づける》《ストーマをもって普通に生活するための方略を用いる》《ストーマをもつ新たな安定した自己を形成する》対処を行っていることが明らかになった。

結論：看護の支援として、世間の目への対処や夫の存在を重要視した支援、個々の価値観に応じた支援、長期にわたる支援の重要性が示唆された。

I. はじめに

消化器ストーマの造設術を受けたストーマ保有者は、肛門からの排便から、手術で腹部に造設されたストーマからの排泄へと、排泄様式の変更を余儀なくされる。ストーマからの排便管理に不可欠なストーマ装具は、ストーマ周囲皮膚障害、臭い、便漏れの問題に対応する機能をもち合わせる装具に改良されてきた(吉川, 1996)。ストーマ装具の機能の向上によりストーマ保有者のQOLは大きく向上してきた。しかし、ストーマ装具が改良された現在においても、ストーマ保有者は、排ガス・便漏れやストーマ周囲皮膚炎などの問題を抱えており、入浴、旅行、対人関係などのさまざまな場面で不自由さや障壁を感じ、生活に適応するために困難を乗り越えなければならないことが報告されている(宮下ら, 1995; 高見沢, 1997; 前川, 2000)。また、日常生活上の問題は、精神状態に影響を与え、うつ症状の原因になることも指摘されている(片岡ら, 2004; 石野ら, 2008)。したがって、日常生活の困難な問題は、生活への適応や心理的な安定を得るために解決しなければならない課題であると言える。

生活に適応するためには自己の変化が必要なことが指摘されており(前川, 2000)、自己は個人の過去の体験によって構築され、個々の体験の捉え方の影響を受ける(梶田, 1998)。日常生活の問題をどのように捉えているかを明らかにすることにより、具体的な支援を導きだせると考えられる。日常生活の問題の捉え方は、個々の価値観に左右され、生活の捉え方は極めて個別的なものである。人々のさまざまな現象の捉え方は、社会的に構築された価値観に影響を受けるため男女差がある(松田, 2000; 浅井, 1995)。また、近年、性差医療が提唱されており、看護支援も男女の特徴に応じた方略が必要である。ストーマ保有者を対象にした研究においては、自己の捉え方に男女差や既婚・未婚の差が指摘されている(Klopp 1990; 高見沢, 1997)。さらに、わが国では現在においても男女の伝統的な役割分担が存在し、男女それぞれの役割意識や対処行動に影響を与えている(牟田, 1996)。これらのことから、既婚女性の日常生活の困難な問題の捉え方や対処には特徴があることが推察される。しかし、これまでのス

トーマ保有者の生活実態調査の対象者は男性が多く、女性のストーマ保有者の日常生活の問題の捉え方や対処方法については、これまでに十分に浮き彫りにされてこなかった可能性が高い。

そこで、困難の捉え方や対処に特徴があると考えられるにもかかわらず、これまで報告が少ないストーマをもつ既婚女性を対象に、日常生活の困難をどのように捉え、どのように対処しているかを具体的に記述し、看護支援の示唆を得るために、本研究に取り組んだ。

II. 目的

本研究の目的は、ストーマをもつ既婚女性が日常生活の困難をどのように捉え、どのように対処しているかを具体的に記述し、そこから看護支援の示唆を得ることである。

III. 研究方法

本研究は、当事者の視点から日常生活の困難の捉え方と対処を記述することを目的としたため、半構成的面接を行い質的帰納的に分析した。

1. 研究対象

永久的ストーマ造設術を50歳台前半までに受け、手術後5年以上経過しておりA病院の外来を受診した患者から、外来担当者から推薦を受け研究協力の同意が得られた患者を選択した。研究者が電話で研究の趣旨、研究参加は義務でないことを説明し、ストーマ造設から現在まで夫が健在でないストーマ保有者は除外し、対象者は5名になった。5名の属性を表1に示した。調査時の年齢は48～58歳、ストーマ造設時の年齢は28～52歳、ストーマ造設後の経過年数は6～30年であった。ストーマ造設の原因疾患は、潰瘍性大腸炎が1例、大腸ポリーポが2例、直腸がんが2例であった。ストーマはいずれも消化器ストーマであった。

2. データ収集方法

データ収集期間は、2004年7月から9月で、対象

表1 対象者の属性

	面接時の年齢	ストーマ造設時の年齢	ストーマ造設経過年数	ストーマの種類	病名	職業
A	50 歳台前半	40 歳台前半	10 年	S 状結腸ストーマ	直腸がん	専業主婦
B	40 歳台後半	30 歳台前半	19 年	上行結腸ストーマ	潰瘍性大腸炎	専業主婦
C	50 歳台後半	20 歳台後半	30 年	回腸ストーマ	家族性大腸ポリポージス	農業
D	50 歳台後半	50 歳台前半	6 年	S 状結腸ストーマ	直腸がん	専業主婦
E	50 歳台後半	40 歳台前半	16 年	回腸ストーマ	家族性大腸ポリポージス	専業主婦

者1名に対して60分から90分の面接を行った。内容確認が必要であった2名に対して2回目の面接を実施した。面接はプライバシーが保てる病院内の個室で実施し、対象者の了解を得てテープに録音をした。面接では、日常生活で困難と捉えている内容とその対処方法、周囲の人々に対する思いや関わり方、ストーマ造設後の日常生活の変化と対処、夫婦の関係性や性生活の変化等を尋ね、ストーマ保有者の語りを妨げないよう配慮し、適宜質問の順序や表現を変えた。

3. 分析方法

ストーマをもつ既婚女性の語りを録音したテープから逐語録を作成し、すべてのデータを分析の対象とした。概念の生成には木下の提案する分析ワークシート(木下, 2003)を使用した。分析ワークシートに、概念、定義、具体例を記録し、理論的メモ欄に解釈や疑問を記録した。研究の全過程において、質的研究に経験豊富な大学教授のスーパーバイズを受け、分析ワークシートに記載した概念名、定義、具体例に矛盾がないか、信用可能性と確認可能性を得られるかを詳細に検討した。

4. 倫理的配慮

研究対象者が通院する施設長宛に文書で研究の趣旨を伝え協力を依頼し、A病院の倫理委員会の許可を得た。研究対象者には、研究協力を依頼した時の説明に加えて、口頭と文書で研究の趣旨や研究参加を断ってもその後のケアに影響しないこと、いつでも研究参加を中止することが可能なこと、答えにくいことは答えなくてもよいことを説明し、データの守秘を確約して承諾、署名を得た。

Ⅳ. 結 果

ストーマをもつ既婚女性が日常生活の困難をどのように捉え、どのように対処したかの視点で分析した結果、表2に示すように18の概念と4つのカテゴリー

を抽出した。日常生活の困難の捉え方は《ストーマをもって生きる上での困難に苦悩する》というカテゴリーで表された。困難の対処は、《ストーマをもつ自分を意味づける》、《ストーマをもって普通に生活するための方略を用いる》、《ストーマをもつ新たな安定した自己を形成する》の3つのカテゴリーで表された。以下、カテゴリーは《 》、概念は< >、インタビューによる生データを「 」で示す。

1. 《ストーマをもって生きる上での困難に苦悩する》

《ストーマをもって生きる上での困難に苦悩する》には、<体調を気にする>、<常につきまとう不安・心配>、<世間の目を気にする>、<夫に負い目を感じる>の4とおりがあった。

1) <体調を気にする>

対象者全員が、日常生活に復帰した後、病気の再燃、がんの再発を懸念したり、あるいは、体力の減退を気に留めていることを語り、常に体調を気にしていた。A氏は、「手術して10年経ったけど、新たながんはできるかもしれない」とがんの再発を気にしていた。B氏は、「昔に比べたら体調はよくなっているけど、やっぱり熱はよくでる」と潰瘍性大腸炎の再燃について語り、C氏「炊事、洗濯はふつう、その上に農家の仕事もしなければならない。できないのよ。3分の1ぐらいしか…」と家庭内の役割が遂行できない体調であることを語った。

2) <常につきまとう不安・心配>

対象者全員が常にストーマによって引き起こされる不快な出来事を思い出して不安に思い、再び、その出来事が起こらないかを心配していた。B氏は、「人と食事をする時にガスが出たりとか、膨れたりするでしょう。うーん、常に気持ちがここ(ストーマ)にあります。忘れていた時がないですね。常にやっぱり頭から離れたことはない」と不随意に排出するガスが頭から

表2 カテゴリー・概念および概念の定義

カテゴリー	概念		概念の定義
ストーマをもって生きる上での困難に苦悩する	1	体調を気にする	がんの再発、病気の再燃などの病状や、家庭内の役割を遂行するための体力を気に留めること
	2	常につきまとう不安・心配	ストーマによって引き起こされる不快な出来事が起こらないかを常に考えてしまい、心を悩ませること
	3	世間の目を気にする	世間の人たちにストーマをもつことを知られたら、どのように思われるかが気がかりであること
	4	夫に負い目を感じる	手術前と同じように性役割を果たせなくなったことから、夫に申しわけないという気持ちを抱くこと
ストーマをもつ自分を意味づける	1	ストーマをもつ自分の状況を気楽に受け止める	ストーマをもつことになったことを悲嘆的に捉えずに、のん気に受け止めること
	2	ストーマをもつ自分を現実的に受け止める	ストーマをもつことが自分の生命維持のために必要である現実を認識することで、ストーマをもつ自分を意味づけること
	3	夫にとっての自分の存在の意味を確認する	夫にとって必要な存在であることに気づかされ、ストーマをもつ自分の意味に置き換えること
ストーマをもって普通に生活するための方略を用いる	1	夫との関係性から自己を規定する	日常生活での自分に対する夫の言動からどのような関係性にあるかを考え、自分の家庭における存在価値を定めること
	2	夫から家事役割のサポートを得る	家庭内における本来の自分の家事役割を遂行するが、体調に応じては、夫に家事役割の一部を担ってもらうこと
	3	性生活を再形成する	手術前と同じような性生活ができないことを認識し、工夫をこらした新たな性生活を形づくること
	4	ストーマケアの工夫をする	日常生活を維持するためにストーマケアを工夫すること
	5	日常生活行動を制限する	日常生活において、人との交流を控えたり、行動範囲を縮小したりすることで行動に制限を加えること
	6	ストーマをカモフラージュする	ストーマがあることを世間に気づかれないように、洋服の工夫、その時の環境を利用するなどの方法で外見を装うこと
	7	状況に応じてストーマを告げる	周囲の人に支援を得るため、あるいは気持ちよく人と交流するために、ストーマをもっていることを理解してくれる人を選択して告げること
ストーマをもつ新たな安定した自己を形成する	1	自分らしさを取り戻す	ストーマ造設術後間もない時期に不可能とあきらめていた趣味やおしゃれを行えるようになったことで、本来の自分を認識すること
	2	切り替える	困難な状況に向きあいながら、信念やモットーからどのように生きていくか考えることで苦悩から逃れること
	3	夫婦の絆を深める	ストーマをもつことによって生じた日常生活のさまざまな困難を乗り越えることで夫との心の結びつきを強めること
	4	他者との新たな関係を形成する	ストーマを告げることで、他者の優しさに触れたり、支援を得たりすることで、ストーマ造設術前とは異なる関係性を形づくること

離れないことを語り、D氏は、「最大に困ることは下痢をした時、外出先で下痢したらお手上げ、下痢の発作さえなければ…いつどこで何が起こるかわからない」と一定しない便の性状に不安を抱いていることを語った。

3) <世間の目を気にする>

A氏、B氏、E氏の3人は、世間の人々にストーマがあることを知られたら、ストーマをもつ自分は、どのように思われるかを語った。対象者にとって世間の目は気がかりなことであった。A氏「身体障害者手帳をすぐもらわなかった。役場の人は洩らさないとと思うけど、『あの人、袋つけている』と言われるかなと思

って…」と地域の人々の目を気にしていた。また、E氏「ストーマはだいたい臭うでしょう。私は全部とっているからお部屋で変えてもわからないけど、偏見があるでしょう。そういう人がいたら、ちょっといやな人もいるでしょう。お年寄りの方は特に」と病院の同室者の目を気にし、気持ちの負担になっていた。

4) <夫に負い目を感じる>

A氏、B氏、D氏の3人は、性生活を成就できず、ストーマ造設術前と同じようには、性役割を果たせなくなったことについて夫に負い目を感じていた。B氏は「30歳で手術したから、それは夫婦生活も盛んな時にそうだったから、やっぱり自分で負い目もあった」

と語り、D氏「(性生活は)やっぱり苦痛だから、苦痛から開放されたいというだけで、夫のほうはそういうわけにはいかない。私のわがままかなと思って…」と語った。

2. 《ストーマをもつ自分を意味づける》

対象者全員が、ストーマ造設術を受けた時の出来事から、ストーマをもつようになった意味について語り、ストーマをもつ自分を意味づけていた。意味づけには3とおろりあり、2とおろりの意味づけを行う者もいた。

1) <ストーマをもつ自分の状況を気楽に受け止める>

C氏は、「ストーマにすることは聞いていなかった。上と下つながぐらいしか、それぐらいしか思っていなかった。気がついたら、『あらま』だわ。アハハ…したのは仕方がない。元にもどるものでもないからね」と語り、ストーマをもつようになったことを深刻に考えないで、気楽に受け止めていた。

2) <ストーマをもつ自分を現実的に受け止める>

A氏は、「命が助かったのだから仕方がないと思っていた」と語り、E氏は「人工肛門にはしたくないなあと思って…。でも命が危ないと言われて…。しょうがないと思った。今まで延ばせし、この辺が潮時かなあと思った」と語り、生命維持のため必要であるという現実を認識することでストーマをもつことになった自分を受け止めていた。

3) <夫にとっての自分の存在の意味を確認する>

A氏は、「週末には必ず(夫が)どこかに連れて行ってくれて、後で聞いたら再発して死んだらだめだからと燃えていたと言っていた」と語り、D氏は「がんとと言われて、夫は私以上にショックを受けたようで、娘が言うには、とても落ち込んで、1日何回ため息ついたかわからない。ごはんも食べなかった」と語り、夫の病気の告知を受けた時の反応や、ストーマ造設術後の間もない時期の出来事から、夫にとって自分の存在が必要であることにあらためて気づき、自分が存在する意味を確認していた。

3. 《ストーマをもって普通に生活するための方略を用いる》について

1) <夫との関係性から自己を規定する>

対象者全員が、日常生活における夫の言動から夫とどのような関係性にあるかを考え、その関係性から自分の役割や存在価値を規定していた。A氏は「ストーマをつけたからと夫はどういうことはなかった。自然に取り入れてくれた」と夫の態度から自分はストーマをもつようになって夫にとって変わらない存在であると規定していた。B氏は「(ストーマがあることを)特に気にしていない。主人はとても理解がある人だから、こういう病気があることを知っていて結婚したから」と日常の夫の態度からストーマをもっていることを理解されていると思っていることを語り、C氏は、「(夫は)ストーマのことは何も言わない。言われたら大喧嘩になる。おまえは仕事をしないでご飯ばかり食べてと言われて大喧嘩になった。自分はしていると思っても、元気な人のようにね」と夫から理解が得られていないと考えていることを語った。

2) <夫から家事役割のサポートを得る>

対象者全員が、妻として家庭内における役割を遂行していたが、体調をくずした時などには、夫に家事役割の一部を担ってもらい、サポートを得ていた。A氏は「病気の時はしてくれる。手伝ってくれる時はある。根本的には手伝い」と語り、C氏「重いものは持って、頼むと言って、自分から動かないようにしている」と語り、E氏「私がぐずぐず言っていたら家の中のゴミは全部集めて、草むしりもしてくれるようになった」と語った。

3) <性生活を再形成する>

対象者全員、手術前と同じようには性生活を行えなくなっていたが、性生活を成就するために、さまざまな工夫をこらして新たな性生活を再形成していた。B氏は「したくないばかりだと、怒る時があるから、じゃあ1週間に1回とか、10日に1回とかで…」と性生活の回数を減らしたことを語り、A氏は「1、2回は試みたんよ。やっぱり痛いんよ。痛いからね。悪いけどね。(中略)男の人は仕方がないから、私が、入れないで…」と痛みを感じない新たな方法を行ったことについて語った。

4) <ストーマケアの工夫をする>

対象者全員が常につきまとう不安や心配を解決するために、ストーマケアの工夫をしていた。A氏「出かける時、袋は換えて…ひとつはいつも持って行くようにしていた」とストーマケアを工夫することで日常生活を調整していることを語った。

5) <日常生活行動を制限する>

ストーマから引き起こされる出来事を心配し、日常生活を制限するという対処を行っている既婚女性もいた。B氏は、「音だけはね、隠せないから(中略)授業参観でも、友達が『ランチを食べて、そこから授業参観に行こう』と誘われても、『ごめん、用事があるから』と誘いを断わる。それはずっとしている」と友人と食事をするという行動を制限していた。D氏は、「動く範囲は狭いです。お友達の家に行くとか、町にはあまり行かない。買い物ぐらいね」と日常生活の行動範囲を制限していることを語った。

6) <ストーマをカモフラージュする>

ストーマをもっていることを世間に気づかれないように外見を装っていた。B氏は「洋服は常にゆったりとしたもので隠すような感じにして」と洋服でカモフラージュし、E氏は「ベルトしていたらわかるから、ベルトははずして、女の人はみんなタオルをあてているから、湯気もウワーウワーとなっているし…」と公衆浴場でタオルを使ってカモフラージュしていた。

7) <状況に応じてストーマを告げる>

A氏、B氏、D氏の3人は日常生活の中で、人から支援を得る必要がある時やストーマを告げたほうが気持ちが楽になると考えた時など、状況に応じてストーマをもっていることを他人に告げていた。D氏は「近所の人には、私は甘えているから、作業があるでしょう。例えば、草抜き、生協の注文、重たいものを持ったり、長時間かがんだりする仕事は困る。ここがこうだから、手術したその時に説明した」とストーマをもっていることを告げて支援を得ていることについて語り、B氏は「子宮がんで子宮をとったのよと、友達が言ってくれたから、言える環境の時には、親しい人には、そのほうがやっぱり、楽かな」とストーマをもっていることを告げて気持ちが楽になったことを語った。

4. 《ストーマをもつ新たな安定した自己を形成する》

対象者全員が、ストーマ造設術後のさまざまな経験あるいは、他者との関わりを通じて、ストーマをもつ自分を捉えなおすことができ、新たな安定した自己を形成していた。

1) <自分らしさを取り戻す>

ストーマ造設術を受けて間もない時期には、不可能とあきらめていた趣味やおしゃれができるようになり、本来の自分を取り戻せたことで喜びを感じていた。A氏は「着物を着られないとあきらめていた。…美容師さんがじょうずに着せてくれて、何がうれしいかというと着物が着られたことがうれしかった。それからお茶を習いに行き始めた」と制限していたおしゃれや趣味が可能になったことを語り、D氏は、「身近で楽しみを見つけるといふか。野草が好きで、里山歩きもキョロキョロしながら。どんどん歩くのはついていけない。皆さんあそこへ何かあるって感じで、だからついて行ける。そういうのが好きだから」と自分らしいと思える趣味が行えるようになったことを語った。

2) <切り替える>

C氏とE氏は、自分が直面している困難な状況の中で、どのように生きていこうとしているかについて語った。困難を苦悩と感じないように、気持ちを切り替えていた。C氏は、「私、3年しかもたないと言われてた。3年、3年で、あとの人生…おまけや、今の人生も拾ったもの、いつ死んでもしょうがない人生なら楽しく生きなければ損や」と人生をどう考えるかを語り、E氏は、「泣いて暮らしても、笑って暮らしても同じ、つまらないこと、辛いことは忘れるようにしている」と自分のモットーについて語った。

3) <夫婦の絆を深める>

A氏、D氏、E氏は、さまざまな困難への対処の中で、夫の愛情や思いやりを確認していた。互いの存在する意味が認識でき、心の結びつきを強めていた。A氏は「夫婦の間で病気して絆が深まったの。お互いにね。私は夫婦生活を悪いなあと思うし、主人は主人で、私に長生きしてほしいと思う」と語り、D氏は「この前、地震があったでしょう。夜中に一人で寝て不安というより、『あれ、地震ね。どうする』と言える人がいると心強い」と語り、E氏は「テレビ見たり、お

話したり、プラトニックラブねってひっついて寝たり…」と絆が深められたことについて語った。

4) <他者との新たな関係を形成する>

A氏、B氏、D氏は、身近な人にストーマをもっていることを告げた時、その人の思いやりを感じ、気持ち楽になり、他者との新たな関係を形成していた。A氏は「私、友達に言うのよ。さらけだしていたらね、その人もそれなりにね。(中略)ツアーに、3人で行った時、気を使ってくれてね。バスタオルで隠してね。Aさん大丈夫と言って…」と友人から支援が得られる関係性になったことを語った。

V. 考 察

1. 日常生活の困難の捉え方について

対象者全員、がんや難病を告知され病気を向かい合ってきた。このような経験をもつ人々は、体調を気にせずにはいられないのが自然なことではないだろうか。ストーマをもつ場合は、体調に加えて、ストーマから引き起こされる問題にも苦悩しなければならなかった。ストーマから引き起こされる出来事を思い<常につきまとう不安・心配>を抱き、家庭内では、<夫に負い目を感じる>と夫に対しての思いに苦悩した。社会の中で生きて行くためには、世間の目が気になり苦悩した。日常生活のあらゆる場面において苦悩を感じることから、日常生活の困難への捉え方は《ストーマをもって生きる上での困難に苦悩する》というカテゴリーで表された。

生きていく上での苦悩の中の<常につきまとう不安・心配>と<世間の目を気にする>は日本女性的な特徴ではないかと考えられた。日本では、人前での排ガスという行為は恥ずべき行為とされ、女性に恥じらいを求める文化的な土壌がある(菅原, 2002)。このような文化的な土壌から、不随意にでる排ガスの音が世間の人に気づかれないかと、いっそう不安や心配を強めていると考えられた。さらに、その苦悩は消えることがないのではないかと考えられた。本調査の対象者は、手術から5年以上経過しており、ストーマケアのセルフケア能力が高まり、また、病気を受け止めるための5年の歳月を経過していると予測していたが、現在も苦悩していることが面接時の語りから伺えた。ストーマ保有者の不安状態の調査では、短時間に誘発される状態不安が高く、状況により不安が増すと述べら

れている(片岡ら, 2004)。外出などの世間の目がある場面では、社会活動の中で生じるトラブルが頭をよぎり<常につきまとう不安・心配>が現れると考えられる。したがって《ストーマをもって生きる上での困難に苦悩する》は、強くなったり弱くなったりはするが、消えてしまわないものであり、長期間にわたる看護支援の必要性があると考えられた。

2. 日常生活の対処について

1) 《ストーマをもつ自分を意味づける》という対処について

対象者全員がストーマ造設術を決心した時の出来事や、ストーマを初めて見た時の思いから、ストーマをもつ自分をどう意味づけているかについて語った。日常生活でさまざまな困難を乗り越えていかなければならない対象者は、生活していくために、とりあえずストーマを受け止める必要があったのであろう。ストーマ保有者のストーマの受容とは「過酷な体験をしているオストメイトが、障害されたことを含めて統合された1人の人間として人生を歩み始めることである」と述べられている(藤田, 2003)。ストーマをもつ既婚女性にとって《ストーマをもつ自分を意味づける》という対処は、人生を歩み始めるために、ストーマがあるという障害を受け止める具体的な対処であると考えられた。

2) 《ストーマをもって普通に生活するための方略を用いる》という対処について

(1) 夫を含めた支援の必要性

日常生活をともにする夫は、既婚女性にとって、さまざまな場面で影響を受ける重要な存在であろう。対象者全員が<夫との関係性から自己を規定する>という対処を行っていた。対象者は夫との関係性がどのようなか、夫はストーマをもつ自分をどのように捉えているのかを夫の日常の態度から想定したり、また言語的に尋ねたりすることで、ストーマをもつ自己を規定していた。重要な存在である他者に対して“自分が愛されている存在であるか、価値ある存在であるか”を再確認する傾向は、女性のほうが男性より高いとされている(勝谷, 2004)。重要な存在である夫に対して、対象者たちが、夫の思いを再確認できることは、気持ちを安定させるために必要な事柄であると言える。

細川ら(1999)はストーマ保有者にとって配偶者は、

自尊感情を高める可能性がある反面、状況によりジレンマが増す原因になると述べている。夫の存在は、既婚女性にとって安定した気持ちにつながる場合と、むしろストレスになる場合の相反する二面があるということであろう。本研究でも、対象者の中には、＜夫との関係性から自己を規定する＞という対処から夫にとって必要な存在と捉えた者と、健康である夫に自分のことは理解できない存在と捉えていた対象者もいた。＜夫との関係性から自己を規定する＞という対処は夫婦の関係性が良好になるかの分岐点になっている可能性があると考えた。わが国において、伝える能力が不足している夫と自分を規定できない妻というコミュニケーションが不足している夫婦には、関係が崩壊する傾向がみられると指摘されている(加藤, 2000)。＜夫との関係性から自己を規定する＞という対処が夫婦の関係を良好にし、＜夫婦の絆を深める＞という対処へとつながっていけば、既婚女性たちはどんなに気持ちが高揚するであろうか。看護師は、夫の態度がストーマをもつ既婚女性にどのような影響を及ぼしているのかを捉え、夫に対して、言葉や態度で表すことを提案することも必要であると考えられた。

(2)＜世間の目を気にする＞困難の対処

対象者は＜世間の目を気にする＞という困難な状況に対して、ストーマをもっていることを気づかれたらどのように思われるだろうかと常に気にしていた。ストーマケアの工夫も、日常生活行動の制限も、ストーマのカモフラージュも、ストーマをもっていることを気づかれないようにするための対処であった。伊藤ら(2002)は、「ストーマ保有者は、トラブルの心配のなさによりストーマの受け止めができ、日常生活活動の回復・拡大が可能になる」と述べている。世間に気づかれないことを心配する必要がなくなることが日常生活の回復・拡大に不可欠ということであろう。しかし、対象者の語りからは、世間に気づかれないという保障は得られず、むしろ、世間に気づかれるかもしれないという心配は永遠にあると捉えられた。常にストーマをもって普通に生活ができるように、適切なストーマケアの工夫を提供することは、看護師の責務であろう。さらに、ストーマケアを提供する時には、ストーマ保有者が永遠に続く苦悩に絶え間なく対処していることを認識することが必要であると考えた。永遠に続く苦悩に絶え間なく対処していることを認識している看護師の対応は、既婚女性たちに「理解されている」という安心感につながるものと考えられるからである。また、

行動を制限している時は、じょうずにストーマをカモフラージュすればよいことを告げることが、気持ちを楽にすることができ生活を拡大する支援になると考える。

(3)＜状況に応じてストーマを告げる＞対処について

B氏は、子宮がんであることを友人から告白されたことがきっかけになり、友人にストーマを告げて気持ちを楽にしていた。A氏は、「私、友達に言うのよ。さらけだしとったらね(中略)気を使ってくれてね」と＜状況に応じて告げる＞ことで友人の優しさに触れることができるようになり、＜他者との新たな関係を形成する＞ことができた。ストーマを告げるか告げないかは女性にとって大きな悩みである(ブーケ, 2008)。他者にストーマをもっていることを告げることは容易ではなかったであろう。しかし、簡単ではないかもしれない＜状況に応じて告げる＞という対処を行うことで、対象者は人の優しさに触れ、＜他者との新たな人間関係を形成する＞ことができた。社会的支援が人間の精神状態に影響し自己の安定につながる(溝上, 2002)と述べられている。＜状況に応じてストーマを告げる＞という対処は、精神的な安定につながる対処であると言える。対象者は頼れる存在や病気を告げられた知人に対してストーマを告げていた。ストーマをもつ既婚女性に対してストーマを保有していることを他人に告げるのは、状況に応じてであることを説明したり、告げるにより社会的支援を得ているストーマをもつ既婚女性の体験を提示したりすることが、理解してくれる人や心を許せる人を選択できるようになる道しるべになるのではないだろうか。

3)《ストーマをもつ新たな安定した自己を形成する》という対処について

《ストーマをもつ新たな安定した自己を形成する》対処には、＜夫婦の絆を深める＞、＜他者との新たな関係を形成する＞、＜自分らしさを取り戻す＞、＜切り替える＞の4とおりがあった。複数の対処を行った既婚女性とひとつの対処しか行わなかった対象者とさまざまであった。

＜状況に応じてストーマを告げる＞という対処を行い、＜他者との新たな関係を形成する＞という対処につながっていた。また、＜夫婦の関係性から自己を規定する＞、＜性生活を再形成する＞という対処から、＜夫婦の絆を深める＞という対処につながっていた。「活動や体験の一部が意識化され、その重要な一部が

記憶され、関連する活動や記憶や意味づけが組織化されることで自己概念が成立していくといわれる(梶田, 1998)。つまり、《ストーマをもって普通に生活するための方略を用いる》という対処は、重要な体験として意味づけられ自己概念に影響し《ストーマをもつ新たな安定した自己を形成する》対処につながっていると考えられた。

＜夫婦の絆を深める＞と、＜他者との新たな関係性を形成する＞対処は、周囲の人々と関係性を形成する対処であった。一方、＜自分らしさを取り戻す＞と＜切り替える＞という対処は、個々の価値観が強く影響して行った対処であると考えられた。ストーマをもつ既婚女性たちは、《ストーマをもって普通に生活するための方略を用いる》という対処では、解決できない《ストーマをもって生きる上での困難に苦悩する》に対して、自分の限界を知り自分のありのままを受けとめていくために、＜自分らしさを取り戻す＞、＜切り替える＞という対処を行い、安定した自己を形成しようとしたと考えられた。悲観的に捉えるのではなく、自分の限界をありのままを受け止め「じょうずにあきらめる」ことが自己の安定につながると言われている(上田, 2002)。＜自分らしさを取り戻す＞と＜切り替える＞という対処は、自己を安定させる「じょうずにあきらめる」という対処の具体的な対処と捉えられる。

ストーマ保有者を対象にした分析では男性より女性のほうが生活に積極的であるとの報告がある(高見沢, 1997)。また、一方では、男女差がないとも報告がされている(道廣ら, 2006)。「自分らしさを取り戻す」「切り替える」という対処を行ったかどうかが積極的な日常生活を行えるかどうかの分岐点になった可能性があると考えた。人はこうありたいと、理想とする自己があり、理想とする自己が行動の動機づけになると述べられている(遠藤, 2002)。具体的に例を挙げれば個々の価値観により趣味やモットーは異なるということであろう。趣味は何か、どのようなことをモットーにしているかなどの個々の価値観の情報を得られるような看護場面でのコミュニケーションが必要になってくるのではないだろうか。

Ⅶ. 本研究の限界と課題

本研究は、対象者が一定の地区に限られていること、5名の研究対象者のうち4名が専業主婦で、就労しているストーマをもつ既婚女性が少ないことなどから、

研究結果はストーマをもつ既婚女性に共通する特徴でない可能性はある。今後は、対象者を増やし、多くの参加者の体験や思いの語りを深めていき、看護支援に反映させていく必要があると考える。

Ⅶ. 結 論

ストーマをもつ既婚女性は、日常生活を《ストーマをもって生きる上での困難に苦悩する》と捉えて、《ストーマをもつ自分を意味づける》、《ストーマをもって普通に生活するための方略を用いる》、《ストーマをもつ安定した自己を形成する》という対処を行っていることが明らかになった。看護の支援として、世間の目への対処や夫の存在を重要視した支援、自己の価値観に応じた支援が必要であり、長期にわたり支援を継続していくことの必要性が示唆された。

謝辞：本研究に参加しさまざまな思いを語ってくださった患者様と、研究を進めるにあたってご指導いただきました元香川大学医学部看護学科の宮武陽子教授に深く感謝いたします。

本研究は香川大学大学院医学系研究科に提出した修士論文の一部に加筆および修正を行ったものである。

文 献

- 浅井美智子(1995)：ジェンダー、宮島喬編、現代社会学(初版)、95-113、有斐閣、東京。
- ブーケ＜若いオストメイトの会＞編集(2008)：カミングアウト、元気の花束—Living with an ostomy—、202-212、ブーケ、兵庫。
- 遠藤由美(2002)：理想自己の役割—その社会心理学的考察—、梶田叡一編、自己意識研究の現在、45-66、ナカニシヤ出版、京都。
- 藤田佳子(2003)：オストメイトの受容に関する和文献の検討、日本赤十字広島看護大学紀要、3(1)、87-94。
- 細川順子、森恵子、林裕子、他4名(1999)：ストーマの受け入れに関する考察—オストメイトの実態調査から—、神戸大学医学部保健学科紀要、14(1)、77-93。
- 石野レイ子、戸梶亜紀彦(2008)：オストメイトの生活と健康志向性および精神健康状態に関する研究、日本ストーマ排泄会誌、24(3)、109-116。
- 伊藤直美、数間恵子、徳永恵子(2002)：退院後の消化器系永久的ストーマ造設者のための生活不安尺度の開発、日本看護科学会誌、22(4)、11-20。
- 梶田叡一(1998)：自己概念と自己評価、自己意識の心理学(第2版)、78-118、東京大学出版会、東京。
- 片岡ひとみ、上月正博、舟山裕士、他4名(2004)：コロストメイトのQOL、健康状態、不安状態及び抑うつ傾向の関係について、日本ストーマ排泄会誌、20(2)、84-90。

- 加藤伊都子(2000)：セクシュアリティからみた夫婦問題，善積京子編，結婚とパートナー関係 問い直される夫婦，191-211，ミネルヴァ書房，京都。
- 勝谷紀子(2004)：改訂版重要他者に対する再確認傾向尺度の信頼性・妥当性の検討，パーソナリティ研究，13(1)，11-20。
- 菅原健介(2002)：人はなぜ恥ずかしがるのかー羞恥と自己イメージの社会心理学(初版)，サイエンス社，東京。
- 木下康仁(2003)：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践一貫的研究への誘い(初版)，弘文堂，東京。
- Klopp A. L.(1990)：Body-image and self concept among individual with stomas, J of ET, 17, 98-105.
- 前川厚子(2000)：ストーマ保有者の自己適応とその関連要因，お茶の水医学雑誌，46(1)，13-22。
- 松田智子(2000)：性別役割分業からみた夫婦関係，善積京子編，結婚とパートナー関係 問い直される夫婦，125-146，ミネルヴァ書房，京都。
- 道廣睦子，村山生美，小野ツルコ，他2名(2006)：ストーマ保有者の社会活動とその関連要因，日本ストーマ排泄会誌，22(2)，73-78。
- 宮下弘子，木村佐由利，子橋川智美，他2名(1995)：オストメイトの術後遠隔時の日常生活の現状と看護上の問題点，看護研究，28(2)，71-77。
- 溝上慎一(2002)：自己評価の規定要因と人との関係性ー自己評価の肯定における関係性の構造の違いー，梶田叡一編，自己意識研究の現在，153-170，ナカニシヤ出版，京都。
- 牟田和恵(1996)：セクシュアリティの編成と近代国家，井上俊，上野千鶴子，大沢真幸他編，セクシュアリティの社会学(初版)，77-93，岩波書店，東京。
- 高見沢美恵子(1997)：人工肛門造設患者の主観的な Quality of life の認識の低下に関する要因，日本 ET 協会学術雑誌，1(1)，19-33。
- 上田琢哉(2002)：自己受容と上手なあきらめ，梶田叡一編，自己意識研究の現在(初版)，189-205，ナカニシヤ出版，京都。
- 吉川隆造(1996)：ストーマ装具の開発と進歩，外科治療，75(5)，529-533。